



村上勇介 編
『現代ペルーの政治危機
—揺れる民主主義と構造問題』

国際書院 2024年 229ページ

ISBN 978-4877913267

ペルーでは、2021年以降、カスティージョ政権の混迷、議会によるカスティージョ罷免とボルアルテ大統領の誕生、それに対する激しい抗議行動といった政治危機が続いている。本書の最大の特徴は、非制度的で脆弱な政党システム、地域間の政治的不均衡と社会経済格差によって特徴づけられるペルーの政治・経済・社会構造問題に着目し、マクロかつ歴史的な視点から、政治危機の背景を探ろうという点にある。それぞれの著者がそうした構造と現代の政治危機の諸相を分析し、それらが互いに結びつく形で全体像を描き出している。

第1章(村上勇介)は、ペルーでは19世紀以来の寡頭支配の影響が残存し、地域的に不均衡な形で経済発展がなされたことによって、政治的・社会的にも地域間の分断や断片化が進んだことを指摘している。第2章(村上)は、歴史的に政党政治の制度化が進まなかったことが、現代の政党の分裂化の進行やカスティージョというアウトサイダーの当選につながったことを説明している。第3章(岡田勇)は、2000年代以降のペルーを特徴づける社会紛争に焦点を当て、新自由主義のもとで拡大した地域間の社会経済格差が社会紛争へとつながっている一方、社会紛争抑制のための制度的対策があまり功を奏していないことを明らかにしている。第4章(磯田沙織)は、中央—地方間の政治的不均衡がいかんして生み出されたのかを、1980年代から2000年代にかけての中途半端に終わった地方分権化の過程から明らかにしている。第5章(中沢知史)は、より歴史的な視点から、1930年代初頭における政治改革の成果と限界を明らかにし、中央—地方間の政治的不均衡が生まれた起点の一つを描き出している。第6章(岡田)は、最後に再び視点を近年に戻し、カスティージョ罷免とそれに対する抗議行動から地域間の社会経済格差という構造問題が浮かび上がることと、その解決がなぜ困難なのかを説明している。

本書から伺えるのは、一度根づいた政治・経済・社会構造に抗うのがいかに難しいのか、制度で構造を覆すのがいかに難しいのか、ということである。構造問題が横たわるペルーの将来について悲観的にならざるを得ないが、本書内でも述べられているように、主要アクター間で合意が形成されれば、構造を変えることは不可能ではない。構造とは何で、どこに問題があり、どこが変革の起点となるのかを正確に把握することこそ、構造の変化に向けた出発点であり、本書はそうした出発点を見出す試みとして位置づけられるはずである。

三浦航太(みうら・こうた/アジア経済研究所)